
魔法少女リリカルなのは 白と蒼の双魔王

天ノ刃羽斬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 白と蒼の双魔王

【Nコード】

N9383N

【作者名】

天ノ刃羽斬

【あらすじ】

高町蒼燕はロキとの戦いの最後に別の世界に飛ばされた。飛ばされた場所はなぜかなのはの世界！！！！ 魔王と呼ばれる少年は管理局の白き魔王と出逢い、平和を掴もうとする。 原作ブレイクの本道まっしぐらなりりカルなのはとカンピオーネー！のクロスオーバー。 いやな人はバックして他のもの読んで

プロローグ 蒼き魔王の消失

とある異世界の地球

そこには最強で優しい魔王がいた。

魔王という呼び方は異称で、本当はカンピオーネと呼ばれる。その他にも、『エピメテウスの落とし子』、『神殺し』などもある。

カンピオーネは神の力をふるって地上に災害を招き、追い払う役目を持つ。その力は絶大で、1時間のうちに街が消えていることなんて山のようにあった。

それでも誰も拒絶しないのは神に勝てるのがカンピオーネしかないからだった。

カンピオーネと呼ばれるための条件は神話の神様、まつろわぬ神を殺してその権能を剥奪することだ。

その条件は異常なまでに難しくてこの世界でも7人しかいなかった。

その中でも最強のカンピオーネ、高町蒼燕^{ソウエン}は被害を最小限にとどめ、神を殺すことに長けたせいで4ヶタ近い種類の神の力を奪っている。

さらに、蒼燕は人の安全をなるべく考え、逃げる時間稼ぎや決闘場所を変えさせる

その圧倒的なまでの強さにほかのカンピオーネも蒼燕には手を出さなくなった。

現在蒼燕が相手にしているのは北欧神話のロキだ。

ちなみに戦闘時間1時間でロキは血塗れでボロボロ、蒼燕は多少けがを負っているが、動くのに問題ない程度だ。

「なぜこの俺が、人間なんかここまで追い詰められる!?!?!?!」

「当然だ。オレには仲間がいる。仲間の命を背負っている以上、お前みたいに独りよがりな戦いしか出来ないやつに負けるわけにはいかないんだ」

蒼燕はそう言ってアポロンから奪った弓を構え、放った。

「お前と相打ちになった神、ヘイルダムと同じ光天神だ。お前は人間界にいちやいけない。元の神話の中に戻れ」

蒼燕は悲しそうに言い、自分と戦ったロキに敬意を表して頭を下げた。

ほかの人から見れば、奇異な行為だが、相手に敬意を表すのは蒼燕の礼儀だった。

「面白い餓鬼だ。だがなあ、相手が死ぬまで目を反らすんじゃないやねえええ!?!?!」

ロキは決死の覚悟で蒼燕を切り裂く。

蒼燕はすぐに対処しようとしたが、なぜか体が動かなかった。

そしてついに、ロキは持ち得ないはずの力を使って蒼燕を殺した。と言っより、消した。髪の毛一本残さず、一瞬にして

「まったく、アメエガキだ」

ロキもそう呟いて死んだ。

その光景を見ていた人は複雑な心境になった。

ロキが死んだのは安全になったと言う証拠なのだからかなり嬉しかった。

だが、『魔王』と呼ばれながら、『慈愛の神王』とも呼ばれた最強が消えた今、これからの戦いは他のカンピオーネに縋るしかない。そこに、どれほどの町や人が消えようとも、どんなワガママにしろとも人々は我慢して頭を下げるしかなかった。

蒼燕のいない生活に耐え切れず、蒼燕を探す人もいた。

「蒼燕様！……！ どこに行ったのでしょうか……！？」

蒼燕が引き連れている中間達は無駄だと思いながらも声を大にして蒼燕を呼ぶ。

それから2カ月後、結局蒼燕の姿は相変わらず見つかってなくて蒼燕は殉職した事になった。

第1章 魔王同士の出会い

〃蒼燕 side〃

「ロキに、空間を渡る術なんてなかったはずなんだけどな」

蒼燕は黒い空間に漂いながらそうつづやいた。

その様子は諦観していて慌てる様子は一切ない。

「ま、神様に常識や道理を求めても仕方ないか。しかもこの空間、隔離型じゃなくて道程型だし」

隔離型というのは閉じ込める、別の空間を拒絶、というのがメイのタイプで言ってしまうえば家に近い。

一方、道程型というのは読んで字のごとく空間と空間を繋ぐ役割を果たす空間、言ってしまうえば道だ。

道がなかったら家からは一步の出ることはできない。かといって道ばかりだったらどこかに止まることができない。

だからこの世界ではバランスのとれた空間になっている。

くだらない事を考えていると蒼燕の向かう先に光があった。

「やっと到着か。ベタに空から落っこちる、なんて冗談はやめてくれよ」

蒼燕はそう呟いて、光の中をくぐった。

その先は、

「しょうがない、地面に墜落した瞬間に蘇生をかけるか」

蒼燕は急に落ち着き、蘇生の効果がある権能を使う準備をする。

使おうとしたのは冥界の神王・ハデスの権能《冥府の生者》メイフ ショウジャ。

効果は半日以内なら誰であろうと蘇生できること。ただし、神の力がかわってないことが条件だ。

だから対神が多い蒼燕はあまり使えない権能だった。

そろそろ地面が迫ってきたころ、二人の少女の声が聞こえた。

「サンダー」

「スターダスト」

その声に合わせて電気と岩が持ち上がる。

地面には60センチぐらいのカプセルにケーブルが生えた形をした機械が何個もある。

ちよつと離れた場所には研究員みたいな人が数人と、変わった服装をした十代前半の少女が3人

(なんか、やな予感がビシビシと来るんだけど)

蒼燕はそんな事を思って衝撃に耐える体勢をとる。

そして、蒼燕の感は的中した。

「「フオール!!!」」

雷と岩はカプセル状の機械に命中し、機械を破壊した。

蒼燕の頭上にも来たが、それは暴風を放って雷を反らし、岩を砕いて防いだ。

機械はほぼ壊れたが、蒼燕が壁になったせいで2機ほど無傷で済み、逃げようとする。

だが、その2機もいきなり氷に包まれて動かなくなった。

その光景に蒼燕は冷や汗をかく

「これは、生きてられるかな？」

カプセル状の機械が氷に包まれた場所は蒼燕の落下地点で、いくらなんでも無傷で済みそうになかった。

途中で3人の少女も蒼燕に気付いたが、時すでに遅く、蒼燕は地面に直径10メートルのクレーターをつけてしまった。

落ちた衝撃からクレーターの上には煙が舞っている。

「えっと、なのはちゃん、小石を持ち上げるときに人も持ち上げたん？」

黒服に白いジャケットと白い帽子を纏っている少女が上下白服の茶色の髪をした少女に聞いた。

「人は持ち上げてないよ。…………たぶん」

「たぶん、なんだ。……………絶対死んだよね？」

白服の少女は自信なさ気に答え、黒服に白いコートを羽織った少女が苦笑まじりに言う。

煙が晴れるとそこには

「ううう、死ぬかと思った!!」

よりもよって氷で鳩尾を打つなんて最悪」

気だるそうにしている蒼燕がほぼ無傷でいた。

「何で生きてんねん!!!!!!!!!!!!!!」

あり得なさすぎる光景に白いジャケットを羽織った少女がツッコム。

「よ、予想以上に衝撃が少なかったんで氷の影響も耐えられるギリギリだったんだ。

打ち所が悪すぎて吐きそうな気分だけど」

「いや、そんなレベルで済む問題じゃないからね」

上下白服の少女も軽くツッコム。

「オレにとつたらその程度の問題だから気にしないで。

それより、ここどこ？」

「ミッドチルダ」ごめん。そこまでいい「え？」

蒼燕は黒い服の少女の言葉をさえぎり、自己完結した。

「とりあえず地球にはない地名だから異世界に飛ばされたんだろうな。」

その言葉に3人とも驚き、目を見合わせた。

そして、白ジャケットの少女が代表して言う。

「確かにここは異世界や。せやけど地球に帰ることは出来るよ。」

「出来るんならやって欲しい。………帰れる可能性は限りなく低いと思うが。」

蒼燕は後の方を聞こえないように言って自分の不安をかき消そうとした。

(アレって、簡単に帰れそうな距離じゃないから)

「「「???」」」

3人の少女は蒼燕が辛そうな顔をしたことに首をかしげたが、蒼燕がわたし達を信じきれてないと思うことにした。その時に、なぜか上下白服の少女は安どした表情を一瞬だけ見せた。

「ま、いいよね。短い間だけどよろしく。わたしはフェイト・T・テストロツサハラオウン。」

黒服の少女はそう言って自己紹介し、蒼燕と握手しようとする。

蒼燕は俯きながらも気づいて握手を返した。

「ほんならウチらも自己紹介しよか。ウチは八神はやて。よろしくな。」

フェイトに連れられて白いジャケットの少女も自己紹介する。

「わたしが最後だね。わたしは高町なのは。わたし達3人は地球育ちだから安心していいよ。」

上下白服の少女はそう言って蒼燕と握手しようとした。

蒼燕は心の中で若干驚きながらも、ポーカーフェイスで表に出さなかった。

「オレは高町蒼燕。偶然ながら君と同じ姓を持つ魔術師だ。」

「～なのはside～」

今回の任務は発掘された古代遺産ロストロギアを安全な場所まで運ぶ簡単な任務。

だけど、異常事態イレギュラーで正体不明の魔導機械が研究員を襲っていたから安全のためにすべての機械を破壊することにしたのだけど、途中で人が降ってきた。

いきなり空から降ってこられた時は本気で驚いた。未確認の魔導

機械を壊してる途中で来たんだから怪我してもいいはずなのに全く怪我をしてなかったことにも驚いた。

だから、人間じゃないのか、とも疑ってしまった。

だけど、辛そうな顔をされたとき、その疑いが頭の中から消えた。

(人間じゃないと、こんな表情はできない)

「ま、いいよね。短い間だけどよろしく。わたしはフェイト・T・テストロツサハラオウン。」

フェイトちゃんはそう言って少年と握手しようとする。

少年は俯きながらも気づいたのか握手を返した。

「ほんならウチらも自己紹介しよか。ウチは八神はやて。よろしくな。」

フェイトちゃんに連れられてはやてちゃんも自己紹介した。

少年は暗い顔を払拭して明るい表情を作った。

「わたしが最後だね。わたしは高町なのは。わたし達3人は地球育

ちだから安心していいよ。」

わたしはそう言って少年と握手しようとした。

「オレは高町蒼燕。偶然ながら君と同じ姓を持つ魔術師だ。」

「それはすっごい偶然やな！！　もしかしてなのはちゃんの遠い親戚か！？」

「魔導師じゃなくて魔術師？　どういうこと？」

はやてちゃんとフェイトちゃんが押すように蒼燕さんに聞くが、蒼燕さんはなぜか苦笑し、研究員の方を見る。

「その話はあとででいいかな？」

そこにある、トランクケースの中身が呪力を集めだして暴走し出している。ここにいたら爆発に巻き込まれるよ。」

蒼燕くんはそう言いながら今回見つかった古代遺産ロストロキアを指す。

「そつだね。ちゃっちゃんと封印しようか。レイジングハート、お願い」

『all right my master . restrict
lock』

わたしの愛杖・レイジングハートに頼んでロストロギアを直した
ケースに桜色のバインド、レストリクトロックをかけてロストロギ
アを封印する。

封印されたことを確認して研究員の人から発掘されたロストロギ
アを受け取り、3人で飛び立とうとする。

「って蒼燕くんが飛べないよね。なのは、なのはがロストロギアを
持っていて。わたしは蒼燕くんを持って飛んで行く」

フェイトちゃんがわたしにそう頼んできたけど、蒼燕くんの方が
ら却下された。

「オレの方は大丈夫。飛翔術は学んでるから飛べるよ」

蒼燕くんはそう言って宙に浮き上がり、わたしに着いてきた。

「とりあえずあっちに行こう。あんなに呪力があつたら人が死ぬ」

蒼燕くんは基地局とは反対の、ロストロギアが発掘された方向を

指さした。

「あそこって何かあったっけ？」

「無いと思うんやけど、ロストログアを持って行くんはあぶないし、あの3人に頼もうか」

3人がヴィータちゃん、シグナムさん、ザフィーラを指していることがすぐに分かって「そうだね」と返し、帰還場所へと飛ぶ。

その時に蒼燕くんは小さく数言を呟いてわたし達に笑顔を向け、着いてくる。その笑顔ではやてちゃんとフェイトちゃんは少し顔を赤くしたが、気付かなかったフリをした。わたしもちよっとドキッとしたし。

「そういうわけで、発掘場所のほうを見てきてもらえませんか？」

シグナムさんに念話で頼んだ。

「何がそういうわけか知らんが、もう着いた。高濃度による魔力爆発で生存者はいないだろう」

「何やて!?!」

シグナムさんの言葉にわたし達は驚きを隠せなかった。

無意識に自分が持っているロストロギアが収められたケースを強く握った。

「それはちゃんと封印されてるから爆発はしないよ。それとも自分の力を信じられない？」

蒼燕くんがわたしの様子に気づいてそんなことを言った。その言葉になぜか安堵を覚えてケースを持つ力を手放さない程度に少しだけ緩めた。

「信じられるよ。だけど、注意を払いすぎても損はないよ」

「それもそうだな。壊れた機械と同種の物体が迫って来てるのも危険ではあるし」

「同種？ まさかつ！！！！！」

フェイトちゃんが蒼燕くんの言葉の意味に気付いて下に広がる森を見る。

わたしとはやてちゃんもフェイトちゃんの後言葉の意味に気付いて森を見る。

そこには、森の木や枝に隠されながらもこのロストログアを狙っていた魔導機械がわたし達を追いかけていた。しかも、さつき交戦した時の10倍ぐらいの数で。

「高町、何があった！！??」

シグナムさんが慌てるように聞いて、フェイトちゃんが答えた。

「先ほどのアンノーンがわたし達を追いかけて来ているんです。それも、かなりの数で」

フェイトちゃん言葉にシグナムさんが息をのむ音が聞こえた。

「ッ！！！！今すぐ向かう！！テストロッサ達はケースを安全な場所まで運んでくれ！！」

「了解。アンノーンの排除をよろしく願います」

「ああ。任せておけ」

シグナムさんがそう言って全速力で向かってくるのを感じた。

第1章 魔王同士の出会い（後書き）

無印からって期待した人、本当にすみません。

蒼燕の力が強すぎて地球でやったら街一つ潰せそうなのである程度自由にできるStrikersからやりました。

無印からって期待した人に向けて心から謝罪申し上げます。

第2話 白い魔王の帰還

蒼燕 side

魔王の得る力はかなり強大で、すべての面において常識外だ。当然視力も例に漏れない。

魔王として得てしまった20・0の視力で追いかけてくる機械を見てみるとハンマーを握った赤いゴスロリ服の少女と桃色の髪の女剣士の二人が森の中に入り込み、オレ達を追いかけて来ていた機械を破壊していく。

（あの人、さっきの爆心地にいた人たちだよな。なんであの機械を破壊してんだ？）

蒼燕は呪力の場所が気になったので遠視術でロストログアの見た場所をずっと見続けていたのだ。

遠視術とはその名の通り、呪力を使って遠くにあるものを見る術だ。

「ごめん。追いかけて来てるの、機械じゃなくて生きてない物が3体だった。機械達はその3体に壊されてる」

高町さん達は『生きてない物』が何なのか分からず首をかしげ、

「やめて。シグナムさん達を生きてない物なんて呼ばないで」

分かったのか高町さんが怒気をはらんだ声で言った。

(そっか。あの人たちは仲間か。それじゃ悪いこと言ったな)

蒼燕は浅はかさを後悔し、なのはに謝る。

「ごめん。仲間を貶けなされて気分がいい人なんていないよな。本当にごめん」

飛行中だから頭を下げることはできないが、ひとまず口だけにした。目的地に着いたらちゃんと頭を下げるつもりだ。

高町さんはオレの様子に驚いて冷静になり、うつむくように口を開く。

「ううん、こっちこそごめん。アンノーンのこともあるから知らなかったら敵と勘違いするよね」

「そんなわけないよ。あの機械を破壊してるんだから高町さんやハラウンさんの仲間だって思うのが当然だろうし」

(そうなんだ。ここはオレがいた場所と違うんだ。あの闇をこの少女たちに見せたらいけないんだ)

蒼燕の油断を誘うために、そして障害になる人間を悉く排除して接近してくる敵を知っているから蒼燕は強い後悔と、ちよつとだけ微笑ましい気持ちを抱いた。

「ところで、その、高町さんってやめてくれない？ 普通になのはでいいから」

「分かった。極力頑張らない」

「冗談でそう言ってみるとなのはがこけてケースを落としそうになった。オレはとっさにケースをキャッチしてそのまま持つ。」

「そこは嘘でも努力するって言ってよ」

「冗談だよ、なのは。オレもタメのほう慣れてるからこっちはいいし」

「じゃあわたしもフェイトって呼んで」

「ウチもはやてって呼んでな」

フェイト、はやても呼び方を変えるように言った。
(しばらくは人生を楽しめそうだな。この世界なら神に襲われることもないだろうし)

「にしてもだつたら惜しかったな。さっきの爆心地にそのトランクケースの中身と同じような存在があったから回収してもらえばよかったよ」

オレがそう言った瞬間、なのは達が固まった。

(なんかまずい事言ったか？ あそこには生存者はもういないはずだから盗まれないように程度の気持ちで言ったんだが)

蒼燕がそんなことを考えているとはやてが聞く。

「ロストロギアが、シグナム達の行った場所にあつたんか？」

「ところでその『ロストロギア』って、何？」

蒼燕がそう聞くとフェイトが答えてくれた。

「それはちよつと長くなるよ。」

わたし達のいる次元空間には幾つもの世界が存在するの。地球もその一つ。

その世界の中には他の世界より進化しすぎて結局滅んでしまうんだけど、その滅んでしまったときに危険な技術の傑作、つまり遺産がほかの世界に流れたりすることがあるの。

その遺産の総称が『ロストロキヤ古代の遺産』

中には使い方によっては世界どころか次元空間まで滅ぼせるものがあるからわたし達『時空管理局』が回収、管理することになってるの」

「じゃあトランクケースの中身は安全だな。これは単体だと直径4?ぐらいしか破壊できそうにないし。」

そんなに狭いんならここで壊しても問題なさそうだな」

この時、蒼燕は自分の感覚で考えて、言ったしまった。

「10?つてめっちゃ広いやん!!!! それ本気で言つとるん!!!!?????」

はやてが大声で叫び、なのはとフェイトは啞然とした顔をして、蒼燕は自分の失敗を悟った。

カンピオーネにとって100~200?の被害は当然に近かった。それは蒼燕でも免れたことはない。

直径10?の破壊で狭いと感じるのはカンピオーネにとって当たり前だった。

(魔王になってからだんだんと人間の感覚が無くなってたな。こう

やってオレ達は破壊神になっていくのか。なんかオレも羅翠蓮のように人間を人間とも思わないやつに変わっていくのか)

蒼燕は中国の傍若無人な女性を思い出して泣きたくなった。そしてもう遅いが人間的なことを言った。

「そうだな。4?はかなり広いな。オレの感覚で言ってしまうて悪かった」

「どんな環境で育ったん？」

はやてが呆れたように聞いてくるので蒼燕はちょっとだけ考え、そして、自分が壊した物の一つを思い出した。

思い出した事件は3年ぐらい前に東京にスルトが出現した。出てきた理由は考古学者が文献にと思って東京にレヴァンティンを持ち込んだからだ。(のちに日本の魔術師がその考古学者に制裁を加えた)

スルトは北欧神話の神様で全てを燃やす魔剣・レヴァンティンを持っていた。その炎がウザいことこの上なく死者も82人出した。ついでに建造物はかなり燃えたがある物だけはロウソクになった。

この事件はオレの中でもかなりの死者数に上ったのでうつすらとだが思い出した。

だから神々と戦う裏の世界について話せるかどうかの判断材料に

なる。

「そのことを語る前に変な質問していい？」

オレの言葉にはやてはなのは、フェイトと顔を見合わせ、頷いた。

「地球の日本って国で東京タワーが炎上したって事件なかった？」

「東京タワーが炎上って聞いたことないよ。フェイトちゃんとはやてちゃんは？」

なのはが他の2人に聞いても2人は首を横に振った。

(やっぱりか。あんな豪勢に燃えたもの知らないはずはない。日本の呪術協会が情報隠蔽した、って線もあるけど悲惨すぎて隠蔽できるレベルじゃないし。この世界は並行世界か)

神々を相手しているだけあって蒼燕の適応力はかなりのものらしい。

「じゃあ適当に言っな。」

なのは達と別の世界にオレが住んでいた地球があつてその世界ではヒト型をした災害が多く降りかかつてきてるんだ。その被害は軽く済んでも1000?。最大は北アメ大陸の全土を恐怖に巻き込んだ。そんな世界に住んでいたせいで4?の被害をたいして思つてないんだよ」

オレはちよつとだけ情報を隠蔽しつつ事実だけ述べた。なのは、フエイト、はやてはそんな光景を想像したのか顔を真つ青にしている。

しばらく真つ青になつた顔を見てるとカンピオーネの持つ直感力がまた機械を捉えた。

(運んでいる物のこともあるし、オレが片付けるか)

蒼燕はそう思つてなのは達にあることを提案する。

「信じられないなら証拠を見せようか?

ちよつと前からあの機械が向かつて来てるし」

蒼燕はそう言うや否や、地面に無数の動物を召喚する。鷲みたいな鳥類もいれば、象や鹿などの哺乳類もいる。

すべての動物に共通していることは移動速度が普通より高く、体が普通の3〜4倍あること、そして謎の機械の方向に向かつて行つてるだけ。そんな動物たちの数はおよそ2千匹。

動物たちは謎の機械をふっ飛ばし、踏み潰し、噛み付き、壊していく。まるで豆腐を砕いて行くように。

「オレの世界に降りかかった災厄の一つ、《無限ムゲンの群獣グンジュウ》。ちなみにこれは小規模バージョンだ」

蒼燕は目を丸くしている3人に向かって軽く説明した。

ちなみにこの権能はギリシャ神話の狩猟の女神・アルテミスの権能だ。とある人物の《貪る群狼》と違ってこっちはいろいろな種類の獣を呼べる。

〜〜フェイトside〜〜

わたしは今、ありえない光景に啞然としている。ありえない大きさの動物たちがいきなり出現してアンノーンを破壊していく。その光景は一方的な蹂躞劇だった……

アンノーンは反撃しているが、動物たちは動きが一切鈍らず、ひたすらに突き進み、壊していく。動物たちの突進をよけようとヒラヒラ動き続けているアンノーンもあつたが、数に押されつぶされている。

「オレの世界に降りかかった災厄の一つ、《無限の群獣》^{ムゲン グンジュウ}。ちなみにこれは小規模バージョンだ」

蒼燕がそういった時、背筋が寒くなった。

（蒼燕の言うことが本当なら、こんな蹂躪劇が1000？範囲で起きたことになる。こんなの、どう頑張っても殺されてしまうしかない）

「ちょっと質問なんやけど、なんで災害を自分で使えるん？まさかその災害って蒼燕君が起してるんか？」

目の前で繰り広げられる光景にはやてが厳しい顔で蒼燕を見て聞いた。蒼燕は退屈というような溜息をついた後に口を開く。

「半分当たり。災害を滅ぼすためには災害を使って相殺させるしかないから。その余波でオレが街を滅ぼしたこともあったし」

「確かにこれなら1000？なんて簡単に滅ぼせそうだね。これじゃロストロギアより危険だよ」

なのはの言葉にわたしはうなずいた。

わたし達の態度に蒼燕は苦笑を浮かべながら返してきた。

「だから特別な条件がそろった時か、オレの実力を見せる時にしか使わない。」

「ところでさ、目的地にまだ着かないの？」

「」「あつ！」「」

蒼燕に言われて通りすぎたことに気付いた。

「オレはこっちの地理は知らないんだからしっかりしてくれ」

「」「ごめん。あの動物たちに気を取られてすっかり忘れてた」

蒼燕の文句になのはがあわてて返したが、はやてが苦笑しながら続きを言う。。

「でもあの動物たちのせいで着地できんで。どないしょっか？」

「じゃああと2分待って。その頃には全滅できるし。なんならアラに命じてその空間だけ空白にしようか？」

蒼燕がそう言つと動物たちは動きを変え、転送ポートの部分だけ避けて行進するようになった。

（何もしてない、よね？　もしかして、念話で命令したのかな？）

私が思っていたことが分かったのか蒼燕は口を開く。

「アレはオレの体の一部みたいなもんだから特に命令はしてない。

と、着いたな。転送をお願いしていいか？」

「わかってるって」

「エイミィ、転送よろしく」

蒼燕の言葉にはやてが答えて、わたしは後方で待機しているエイミィに念話でお願いした。

転送が無事にすんだら蒼燕はシグナム達を生きてないって言ったことをまた謝ってきたがシグナムとヴィータが一発ずつ殴ってその話は終わった。

そのあとは適当に蒼燕が記憶喪失なんて嘘を並べて管理局の検査

をパスし、わたし達もパーティーに行った。

ちなみに嘘を訂正しようと思ったけど何故かいきなり喋る事が出来なくなった。

第2話 白い魔王の帰還（後書き）

はい、原作と権能が違います。

この場合アポロン&アルテミスの権能が入れ替わってます。ちよつとだけ解説しますね。

アポロン

原作：《貪る群狼》（むさぼるぐんろう） 巨狼を無限に召還して、自身を大きい狼に変える
本作：《陽炎の天弓》（やうえんてんきゆう） 太陽の力を圧縮して相手に当てる。日中で、しかも1日1発しか放てない条件がある。

アルテミス

原作：満月の夜に装填できる青白い光の矢を放つ。使えるのは一月に6発。一発でも高い威力を誇る
本作：《無限の群獣》（むげんぐんじゆう） 鹿、大鷲などの動物を無限に召還できて、自身を獣に変える。

です!!

かなり分かりづらいかも知れませんが、そこは容赦してください
あと、ある程度案はあるけど、権能についての案を無期限で募集したいと思います。出来たら参加してください。
制限は解除しておくので偽名でもかまいません

第3話 同窓会

〃〃蒼燕 side 〃〃

同窓会みたいなホームパーティーらしく、なのは、フェイト、はやてと親しそうな人たちが集まっていた。

オレは居心地が悪いので一人蚊帳の外。

(でもこんな、穏やかな空気もいいな。あっちじゃ媚を売ろうなんて輩が多いから心休まる日なんて一切なかったし)

魔術結社の人間や神話の神々に邪魔されてもう体験できなかった
安息の時間を再び噛み締めている。

そんな状態でいるとホームパーティーに参加している人の中で歳
年長そうな緑髪の女性が近寄ってきた。

「すみません。オレ、何か迷惑かけました？ えっと、」

「リンディよ。リンディ・ハラウン。

迷惑はかけてないわ。ただ、あなたが何者が説明だけはしてもら
おうと思っ

「記憶喪失の、次元漂流者だそうです。詳しくはわかりません」

「ウソ、よね？ フェイトさん達の前だと穏やかにしてるけど、いなかったらフェイトさん達以外に警戒しているわ。」

（この人、何気に鋭いな）

リンディの言うとおり蒼燕はなのは、フェイトの2人がいるときだけ警戒を解いていた。それは接してあってあの2人は『おためごかし』なんて出来そうにない性格だと分かったからである。はやてはさりげなくやると分かったので警戒対象の一人にいれた。

オレはこの人に対して警戒度を高め、ジッとリンディを見つめながら軽く殺気を当てる。

殺気に当てられながらもリンディさんは気丈に振舞いながらオレを見つめ返している。殺気が足りないかとも思ったが肩が震えてるので当てるレベルを上げようとは思わず、ずっと見つめる。

だが途中で飽きて殺気を止め、口を開く。

「オレはおそらく並行世界の人間です。帰る方法はまだ見当がついてませんからフェイト達には迷惑な存在になるかもしれせん。今言えるのはここまでです」

「それはどうしてかしら？」

「分かってて言ってますよね？」

並行世界というのは別の進化を遂げた世界。つまり、自分たちが知らないことがタップリ詰まった宝箱です。それ故にもし侵攻されればオレの世界が大ダメージを負うのは必至でしょうね」

オレは冷たく言い、リンディさんもそれが分かっているのか苦笑している。

ただ、シリアスな雰囲気はとある人物の行動によって壊された。

「さて。いろいろ聞かせてもらおうで」

「お手柔らかにな」

いきなり捕縛したはやての言葉に蒼燕は苦笑いを浮かべながら返す。

「まずあの獣はなんなの？ いや、それ以前になんで災害を起こせるの？」

なのはが最初に聞いてきた。この質問なら当たり障りのない程度に話すか。

「なのはたち以外にまた説明するのはめんどいから省くとして、あ

の獣はオレの呪力で出来た生物だよ。ちなみに災害を起こせるのは災害の元凶を体に内包してるから」

「体に内包つて！！ そんなことして生きていられるの！！??？」

「決まってんじゃない。はやてがそのちっこい幼女を体に入れても生きてるでしょ」

オレははやてのそばにいる身長30?くらいの水色の髪の少女を指差しながら言う。

その少女を見たときは本当に驚いた。転送されてから宇宙が見える船に乗ったらはやてがいきなり光りだして、その場所にいたのは茶髪になったはやてと白い騎士服を着た幼女がいたのだった。

ちなみに自己紹介は受けたが『ちっこい幼女』と呼ぶことに決めた。その時に輸送の件に関わった人達の自己紹介も受けた。

「ラインの名前はラインフォース？ですっ！！！！ いい加減名前を覚えてくださいっ！！！！」

オレがちっこい幼女と呼ぶ少女・ラインフォース？はいちいち反論してくるがオレは馬耳東風並みに聞き逃す。

「お前、幼女って呼ばれてんのか」

ロストロギアの護送中は赤いゴスロリ服を着ていた少女・ヴィータは笑いを堪えるように体を丸めていてもうちよっど行けば爆笑しそっだった。

「大丈夫だ。お前もちっこさじゃどっこいどっこい」

「あんだとテメエツ!!」

「よせ。料理が台無しになるからやるなら外でやれ」

余計な事を言っつてヴィータがキレた。ヴィータはすぐにハンマーを持ち出したが桃色の髪の毛のポニーテールの女性・シグナムがヴィータを止める。

「幼女といえば、そっちの人たちって誰？」

オレは疑問符を浮かべながら犬耳の生えた赤い髪の毛の5歳くらいの少女、金髪で指に二つの指輪を付けた女性、眼鏡をかけた20代の男性のことを聞く。

「あたしはフェイトの使い魔、アルフだよ。見ての通り祖体は狼」

最初に犬耳の少女が自己紹介し、それに倣うように金髪の女性と眼鏡の男性も自己紹介する。

「湖の騎士、シャマルです。はやてちゃんの守護騎士をやっています」

「僕はユーノ・スクライア。なのは達の友人だ」

「そっか。とりあえず知ってると思うけど、高町蒼燕。並行世界の次元漂流者だ」

オレは自己紹介しながら手を差し出し握手する。

「男女差別だ!!」

なのはに言われて自分から握手しようとしたことに気付いた。

「悪い。ユーノの放つ雰囲気が考古学者風だから無意識に握手を求めた。考古学者にはいろいろお世話になってるからつい敬意を払ってしまうんだ」

なのは達の不満そうな顔にオレはそう答えて手を離れた。ユーノは少し嬉しそうに笑ってオレに質問をぶつけてくる。

「君の言う呪力ってなんなの？」

「こつちの世界風に言えば魔力。オレの世界では氣やエーテルやらでいろんな呼ばれ方してる生体エネルギーってとこ」

「「「「「エエエエエツ！！」なっ！！」「」「」「」

その言葉になのはたち全員が驚いた。

「なんかオレ、まずいこと言った？」

「違うよ。あんな数の動物が君の魔力で作られたことに驚いたのさ。」

ユーノが驚いた顔をしながらオレに説明してくれた。

（そんなに驚くことでもない気がするんだが。あの程度の呪力なんて100回使ってやっと蚊に刺された程度なんだが）

カンピオーネは全員桁違いの魔力を持ったため、逆に蒼燕が呆れていた。余談だが、蒼燕の元いた世界でも獣を一匹呼べるほどの呪力を出すには二人がかりだ。

「あの程度の芸当、誰でもできるぞ。なんなら似たような魔術を使えるやつがいたからその魔術を教えてやるつか？」

蒼燕は鉄でできた獅子を使う少年を思い出してなのは達に聞く。

そして後悔した。何の為に自分の情報を隠蔽しようとしたのかを思い出して。だが、蒼燕の予想に反した言葉が聞こえた。

「止めておくよ。そんな魔法、使う機会には恵まれそうもないし、扱い切れそうにないから」

なのはがそう言ったので蒼燕は深く考えた。

(たしかにあいつでもこの魔術を覚えるのに苦労したな。たまに制御できなくなつて術者を殺そうとしかけたこともあつたし)

「わかった。この魔法は教えない。まあ互いの和平のためにオレの知る魔術を教える気は殆ど無かったが、補助的なものなら少しだけ教えていいよ」

オレはそう言って良さそうな魔術を脳内にリストアップする。

そんなことをしていると最後にフェイトが聞いてきた。

「なら最後。これは最初っから気になったんだけど、蒼燕って何者？ 魔術師ってのはわたし達の世界でいう魔導師なんだろうけど、それでもあんな速度で落ちてきてほとんど無傷ってのは絶対にあり得ない。返答次第によってはここで捕まえるよ」

「辛辣なことを言うね。」

「そうだな。オレは人間であると同時に人間じゃない存在。こんな解説でどうだ？」

「それだけで納得すると思う？」

「真実をぼかして答えるとフェイトは冷たく返して聞く。」

（納得して欲しかったんだけどな。まあ成り方さえ言わなきゃ大丈夫か）

「納得しないと思うよ。だから、今から話すことはここだけの秘密にしてほしい。もし他の人にバレたら危険な世界だって判断されてオレの故郷が滅ぼされそうだし」

ひとまずそう言って念を押す。オレの出す雰囲気にも吞まれて全員息をのんだ。

「じゃあ言つよ。」

護送中にも言った通り、災害に対抗するには災害の力で戦うしかなかった。だからオレの世界では人間に災害の根源を体に封印させたんだ。

「だけど災害は災害。普通の人間に耐えきれぬわけがない。」

「だからこそ、災害の元凶たる存在が封印された体を強化するんだよ。」

「五感とは異常なまでになって視力20・0や超音波を聞き取るのは当然の範囲。ついでにマグマに落とされても耐えられるぐらい頑丈になるし、呪力の保有量や呪力耐性も過剰に上がる。一番使える強化はどんな言語だろうと2週間もあれば読んで会話できるようになるほど言語能力が上がる。」

「これでもかかってぐらいデタラメな能力ね。なにか反動とかないの？」

「そんな話は聞いたことない。まあ条件がつくことはざらにあるけど。例えば2トンある物を犠牲にしないと呼べない怪獣とか。」

「オレの持つアポロンだったら日中（午前6時から午後6時まで）にしか使えないし、ほかに条件付きの権能がある。」

「マジかよ。」

「さすがに呆れたのか全員絶句した。」

そこで蒼燕は聞きたいことを聞くことにした。

「それじゃ今度はこっちから質問。あの円形と三角形の光る板は何？」

「こっちの世界の魔法陣だよ。」

円形のほうがミッドチルダ式と言って遠近取り揃えたオールラウンダーなのが特徴

三角形のほうがベルカ式と言って武器や徒手を用いて接触した対象に直接魔力を叩き込むのを基本とし、遠距離戦・複数戦闘をある程度切り捨て、近接系による個人戦闘に特化しているのがその特徴」

蒼燕の質問にフェイトが答え、蒼燕は頭の中を整理しながら次の質問をした。

「じゃあフェイトの持つ黒斧、なのはとはやての持つ杖や本って何？ あれは呪具、魔力の籠った機械だよな」

「デバイスって言って魔法の補助をしてくれたりする相棒だよ」

「へえ」

今度はなのはが答えてくれて、蒼燕はある企みを思いついた。

(こっちの魔術体系は大雑把にわかるし、誤魔化しながら戦^{すべ}術も必要だよな)

「今度オレにも作ってくれない？」

「構わないよ。今度マリーに頼んでみる」

オレが皆に頼みこむとフェイトがあっさり了承した。

「ありがとう」

「別にいいって。でも体を調べられたり要望を聞かれたりするから覚悟しておくように」

「ははは。そこら辺はしょうがないと思って割り切る」

(ほんとには調べさせたくないけど、権能を使えばまた口は封じられるし。問題ないか)

そしてこのホームパーティーはお開きとなり、オレはフェイトの家で寝た。

第3話 同窓会（後書き）

というわけで次回、蒼燕がデバイスを貰います。模擬戦をするんですが、相手はあの人です。どちらが勝つのでしょうか？
おふたりの意気込みをどうぞ！！

蒼燕

「流石に王者として負けるわけには行かないから絶対勝つよ」

????

「わたしもシグナムさんと引き分けるくらいの実力はあるので負ける気はありませんよ」

50

だそうです。解説兼空気の八神はやてさんコメントをどうぞ

はやて

「はいはい、……って誰が空気やねん！！！！」

すみません、時間です。ここで終わります

はやて

「ちよう、待ってや！ー！まだコメントも……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9383n/>

魔法少女リリカルなのは 白と蒼の双魔王

2011年1月23日21時03分発行